



今日は森のパトロール 鳥獣ハンターと森を歩く

鳥獣ハンターってどんな人？

全国各地で、野生動物による食害が発生しています。餌を求めて山から下りた野生動物が、直接人間に害を与える危険性も高まります。そこで、個体数を調整するために駆除をおこなうのが鳥獣ハンター（以下ハンター）です。

2021年5月、いの町本川にある山林にて、害獣（※）駆除を行うハンターにシカ害の現状を見せてもらいました。

ハンターという使命

この日の作業は、罠の設置と仕掛けた罠の見回りです。山の中腹で車を止めて見回すと、前日からの雨でぬかるんだ地面に、シカの足跡が残っています。周辺のスギが何本か、幹をかじられて枯れています。

「ここに罠を設置します。山を守るためには、害獣を駆除しなければなりません。」と話するのは中江産業(株)・森林事業本部部長の澤田洋充さん。食害を受けた苗木を、シカにかじられても再生するカラマツに植え替えるなど、さまざまな対策をしてきたといいます。でも、シカの数が増えれば増えた分だけ、食害が増えるのは当然のこと。もう、個体数の増加をくい止める以外に、解決策はないと判断しました。「当初は抵抗もありました。でも、

山が荒れば私たちは仕事ができなくなります。あのまま放置していたら、取り返しがつかなくなっていました。」と、苦しい胸の内を明かします。

1898年に高知県で山林事業を開始。土佐町に森林事業本部を構える同社は、急増したシカによる食害を防ぎ、社有林を守るために2012年から害獣駆除を開始しました。

現在、社員13名が狩猟免許試験に合格して狩猟免許を受けており、猟具の安全で適切な使用に関する知識と技術を持っています。

正しい知識で被害に向き合う

しかし、いくら頑張って頭数管理をしても、真境からドツツとシカが押し寄せてくることがあるといいます。「他のエリアがやらないければ、そちらから入ってくるわけです。そして、また「一から...その繰り返しです。」という澤田さん。

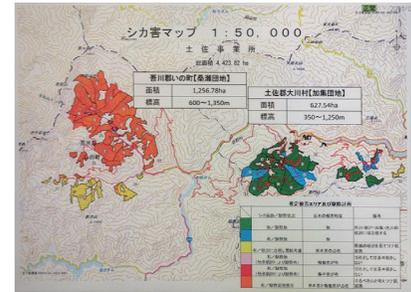
そんなやるせない思いを抱えながらも、それぞれ異なる獣道、行動範囲などを間近に観察しながら、罠猟を極めてきました。依頼があれば、大学での講演や、県内企業はもちろん県外企業への講習もおこないます。高知県の鳥獣対策課からの依頼で、くくり罠による捕獲体験ツアーもおこなっています。被害の元となる野生動物は、駆除される数を超えてはるかに増えつつけている現状に反し、高齢化などの理由でハンターの数は減っています。これまで培ったノウハウを伝えることも、自分の使命だと考える澤田さん。「知識と情報を共有することで、みんなが前向きに取り組めるのではないかと感じています。」

野生鳥獣に対する深い理解と感謝の念を持ち、野生鳥獣と人がしあわせに共存していくために、ハンターは今日も森を巡ります。
※ 農作物を食い荒らす、家畜を襲つたなど人間の生産活動に悪影響を与える動物。

かじられた木は、幹の内部が徐々に腐り、いつしか強風により折れて倒れてしまいます。



高知県中山間振興・交通部鳥獣対策課より提供



調査を反映して作成されたシカ害マップを基に、対策をおこなっています。



鮮やかなオレンジ色のベストを着た藤田保志さん(左)、澤田洋充さん(中央)、鈴木公大さん(右)。オレンジ色は、人間の目にはよく見え、動物には認識しにくいといわれています。



くくり罠をしかける

使用する罠はねじりバナタイプのくくり罠。土に埋めた罠を獣が踏むと、ワイヤーに足を捕らえられ逃げられなくなる仕組みです。



1 罠を設置する場所を決める。



2 土を掘り、外パイプを設置する。



3 罠をセットする。



4 土で覆いカモフラージュ。



5 罠の前に木の枝などを置く。
※動物が障害物を跨ぐと、足は自然と罠の位置を踏む工夫。



6 シャッフルをしなる木に固定する。
※引っ張る力を逃がしワイヤーを切れにくくする工夫。



7 設置場所に目印のリボンをつける。
罠をしかけた場所は、ひんぱんに見回ります。



「いただきます。」
食べるときは、感謝を込めて、命に。

この日、一頭のシカが罠にかかっていました。

「命を無駄にしないために、今、シビエ料理が注目されているよ。」

中江産業(株)・森林事業本部
住所/土佐町田井1207-2
TEL/0887・82・0786
<https://www.nakae-sangyo.com/>
高知県内に3,765haの山林を所有。

この日の取材の様子はこちらから
YouTubeチャンネル
森林環境情報誌 もりりん



かじられて枯れたスギ



シカの足跡